

埼玉県・私立春日部共栄中学校

考查・授業時程・学期制の改革

中間考查を廃止して単元テストを導入することで、生徒が授業や学習に集中して取り組める環境をつくる



学校概要

- ◎設立 1980 (昭和55) 年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約 550 人
- ◎2022年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、東京工業大、横浜国立大、東京都立大などに91人が合格。私立大は、青山学院大、学習院大、慶應義塾大、上智大、中央大、東京理科大、明治大、法政大、早稲田大などに延べ1,004人が合格。

変革の背景

「**「あえて三兔を追え」**からこそ、**学習に集中できる環境を整備したい**」

埼玉県・私立春日部共栄中学校は、「**「あえて三兔を追え」**を教育方針に掲げ、勉強、学校行事、部活動のいずれにも全力で取り組むことを生徒に推奨している。多くの生徒が大学進学を目指しつつ、部活動にも励み、水泳部や吹奏楽部など、全国大会の常連となっている部活動も多い。

しかし、生徒が学習に集中できる環境を十分整えられていないことを課題視していたと、教務部長の吉場慎二先生は語る。

「年5回の定期考查の合間に慌ただしく学校行事が入り、生徒は学習に集中しづらい状況でした。教育方針と異なり、部活動中心の生活を送る生徒も、少なくありませんでした」
学習評価は、定期考查に比重を置いていたため、定期考查の直前のみ勉強をして、成績を維持する生徒もいた。生徒からは、「なぜ、日頃の課題や提出物にきちんと取り組まず、定期考查で点が取れていることで成績を維持しているような生徒が、指定校型の学校推薦型選抜の受験者に選ばれるのか」といった声が上がることもあった。定期考查の結果だけでなく、日頃からの学習の積み重ねを評価する仕組みをつくる必要があった。

また、大学入試で頻出する事項を「重要問

題」として授業中に取り組みせ、その問題を定期考查に出題することを、定期考查の出題方針としていた時期があった。大学入試で頻出の事項を授業や定期考查で扱うことで、大学入試で求められる学力を確実に定着させるというねらいがあったが、成績中・下位層を中心に、「丸暗記すれば、定期考查では点が取れる」と、重要問題の解答をただ覚えるだけのような学習をしてしまう生徒が散見されていた。重要問題は必ずしも学力の伸長には寄与していないと、吉場先生は感じていた。

「生徒の声をきっかけに、定期考查重視の学習評価や定期考查の出題方針が、生徒の学習姿勢に良い影響を与えていないと気づきました。学校の課題を抽出する際には、生徒の

声に耳を傾け、生徒の姿をしっかりと捉えることが大切だと思いました」

変革の一手

生徒も教師も授業に集中できるよう、 中間考査を廃止し、単元テストを導入

2019年度の初め、吉場先生は、教務部長や進路指導部長、教科主任などから成る「カリキュラム委員会」で、1学期の中間考査の廃止を提案した。併せて、中間考査の代わりに単元テストを実施し、短いスパンで学習内容の定着度を確認する機会を設けることと、定期考査の比重が高い評価を、平常点（課題の提出状況、単元テスト、授業に取り組む姿勢）5割、期末考査5割の割合での評価に改めること、さらに、定期考査での重要問題の扱いを抜本的に見直すことも提案した。

「1学期の授業は、実質的に4月中旬に始まり、4月下旬から5月上旬には大型連休があるため、十分な授業時数を確保できないまま5月下旬の中間考査を迎えていました。5月は、6月上旬に行われる文化祭の準備があり、文化祭が終わると期末考査の時期になります。そうした慌ただしさを是正し、生徒も教師も落ち着いて授業に取り組む、単元テス

トで学習の定着度を測り、その単元テストや授業態度などを評価する仕組みにしようと説明しました。カリキュラム委員会のメンバーは、私の提案の意図を理解するだけでなく、『2学期の中間考査も廃止にしてはどうか』といった提案もしてくれました」（吉場先生）

カリキュラム委員会での議論を踏まえ、1・2学期の中間考査の廃止と単元テストの導入を、各教科会に諮った。当時、国語科教科主任だった中村麻衣先生は、国語科内で上がった懸念点を一つひとつ解消していったと語る。

「授業中に単元テストを行うと、生徒の活動や教師の解説の時間が減ってしまうのではないかと、進度の違いでクラスによってテストの実施日が異なると、問題が流出してしまうのではないかとといった声が上がりました。そうした懸念点は、カリキュラム委員会で検討し、最終的には、単元テストは15分間程度で到達度が測れる問題にすること、単元テストを受けるにあたっての注意事項（**図1**）を教務部が作成して生徒に配布することとし、中間考査の廃止に至りました」

授業にゆとりが生まれ、 活動時間の確保や進度の調整が容易に

そうして全教科会の合意を得て、20年度か

図1 生徒に配布した単元テストの注意事項（抜粋）

- ①問題を他者に流出させる行為や、机の中にあるプリント等を見ながら解答することは禁止です。
問題を流出させることは、正しい評価ができないことにつながります。皆さんの点数に応じて、先生は授業スピードやレベル、内容を調整していますので、本来の学力に合った授業をするのが難しくなってしまいます。
- ②問題を他者に流出させた場合や、机の中にあるプリント等を見ながら受験するといった不正行為は、定期考査時のカンニング行為と同等の扱いをします。
当該のテストは0点、場合によっては他の教科の単元テストも0点になります。単元テストは評価に大きくかわるので、評定はもちろんのこと、学校推薦型選抜等にも影響します。
- ③単元テストの受験環境を整えて受験しましょう。
原則は定期考査時と受験上のルールは同じです（違うのは、机の中に荷物が入っているかどうかのみです）。～以下略～

※学校資料を基に編集部で作成。

ら中間考査を廃止し、単元テストを導入した。単元テストは原則、単元終了時に授業の時間内で行うこととし、実施の頻度や解答時間など、実施方法の大枠を各教科内ですり合わせた上で、詳細は教師個々に任せることにした。教師によっては、単元テストを生徒に予告せずに実施することで、生徒が常に学習する意識を持つようになり、単元テスト以外にも小テストをこまめに行い、学習状況を了

寧に見取り、指導に反映したりしている。

定期考査実施の間隔が空き、ゆとりを持って授業ができるようになったことで、授業に思考力や判断力、表現力などを育む活動を取り入れやすくなったと、英語科教科主任の岡舞衣子先生は指摘する。

「読んだ英文を自分の言葉にして話すリテリングや、クラスメートが書いた英作文を読み合う活動に、多くの時間を充てることで、できるようになりました。素材文が社会性の高いテーマの時は、素材文の内容理解に加えて、そのテーマについて生徒同士で議論する時間も設けるようにしています」

進路指導部長の伊藤恒先生は、生徒主体の授業がよりしやすくなったと語る。

「以前は、次の定期考査の出題範囲を、試験前までに終わらせなければならぬといったプレッシャーがありました。しかし今は、生徒の理解度に応じて学習内容を変える余裕ができ、生徒本位で授業進度を調整することができるようになりました」

単元テストや課題の提出状況、授業に取り組む姿勢も評価の対象にしたことで、日頃の授業や学習を大切に生徒も増えている。

「単元テストを抜き打ちで実施することが定着して以来、定期考査直前に知識を詰め込むのではなく、授業があったその日のうちに復習をする習慣が、生徒に少しずつ定着して

いるのを感じます」（岡先生）

数学科教科主任の小篠拓史先生は、課題の提出状況が学習評価の対象になったことから、自分の理解度に応じて、自ら問題を選んで取り組んだノートを、任意で提出させる課題を出している。提出されたノートの内容を、観点別学習状況の評価の3つの観点でそれぞれ3段階で評価。さらに、評価の内容を生徒にフィードバックしており、任意の課題でありながら、相当数の生徒が提出しているという。

「生徒は、私のフィードバックを見て、自分の学習状況や学習方法が適切であるかを確認しています。学習状況や学習方法を自己分析し、自分が取り組むべき問題を選択して、自分で力をつけていく生徒が増えています」

完全週5日制、45分授業、2期制の導入で、学びの質をさらに深める

今年度は、完全週5日制、45分授業、2期制の導入に踏み切った。

完全週5日制としたのは、生徒の学習時間と、部活動及び休養の時間を確保するためであり、教師の働き方改革の一環でもある。そして、それまで行っていた土曜の授業時間分を平日に割り振って、1日7コマとしても終業時刻が遅くならないよう、1コマの授業時



教務部長
吉場慎二 よしば・しんじ
教職歴21年。同校に赴任して20年目。入試担当委員。情報科。



進路指導部長
伊藤恒 いとう・ひさし
教職歴30年。同校に赴任して30年目。数学科。



教務部
中村麻衣 なかむら・まい
教職歴7年。同校に赴任して8年目。国語科。



数学科教科主任
小篠拓史 おぎさ・ひろ
教職歴7年。同校に赴任して7年目。数学科。



英語科教科主任
岡舞衣子 おか・まいこ
教職歴6年。同校に赴任して7年目。英語科。

間を50分間から45分間に短縮。さらに、長期休業の日数を減らして、年間の授業時間数を確保することにした。

「数年前から45分授業は試行していました。50分授業よりも最後まで集中力を保てること、教師にも生徒にも好評だったことから、45分授業に踏み切りました」（吉場先生）

3学期制は、2期制（前期4〜9月、後期

図2 2019～22年度 年間計画の変遷

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
2019年度 まで	始業式 入学式	大型連休	中間考査 文化祭	期末考査		三者面談	体育祭 中間考査		期末考査		中学校・高校 入試の休業日	学年末考査
	1学期			夏季休業		2学期		冬季休業		3学期		春季休業
2020～ 21年度	始業式 入学式	大型連休	文化祭	期末考査		三者面談	体育祭	1学期の中間考査、2学期の中間考査を廃止。	期末考査		中学校・高校 入試の休業日	学年末考査
	1学期			夏季休業		2学期		冬季休業		3学期		春季休業
2022年度	始業式 入学式	大型連休	文化祭	前期定期考査 三者面談	夏季休業	校内統一試験	体育祭	三者面談を9月から7月に移動。夏季休業・冬季休業明けには、校内統一試験を実施。		中学校・高校 入試の休業日	校内統一試験	後期定期考査
	前期(夏季休業含む)						後期(冬季休業含む)					

学校行事は主要なものを掲載。赤字は、変更・追加した項目。

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の成果・展望

生徒の学力を的確に把握し、
日々の指導に反映させる

完全週5日制、45分授業、2期制は始まっ

10(3月)に変えた。3学期制では、1学期が終わって夏季休業に入ると、生徒の意識が学習から離れがちになるという課題があった。そこで、これまで9月に実施していた三者面談を7月に移動し、休業明けには校内統一試験を実施して、夏季休業中の学習の成果を測ることにした。

「校内統一試験は、模擬試験のように、初見の問題や応用問題などを出題することとし、前期の成績の評価の対象にすると、生徒に伝えました。そして、三者面談で夏季休業中の学習計画について話す場を設け、生徒が自身の学習について、課題意識を持って夏季休業を過ごせるようになりました」(吉場先生)

冬季休業明けの1月末にも、校内統一試験を実施する計画だ。1月は、中学校入試や高校入試があり、休業日が多い。そこで、夏季休業と同様に、生徒が冬季休業中や1月の休業日に、しっかりと自学自習に取り組むようにするというねらいがある(図2)。

ただばかりで、成果はこれから検証していく。ただ既に、生徒から、「自分が取り組みたい学習に取り組める時間を持てるようになった」といった肯定的な声が上がっており、同校は改革の手応えを感じている。

今後の展望について、伊藤先生は、「私個人としては、将来的に、中間考査だけでなく、定期考査自体をなくしてもよいのではないかと考えています」と語る。

「単元テストや小テストを実施することで、教師は生徒の学習の状況を日頃からの確に把握し、それを指導に生かせるようになりました。それは、一連の改革の大きな成果の1つです。また、生徒の学習の到達度は、単元テストや小テストで十分測ることができていますと考えています」(伊藤先生)

同校では、新たな取り組みを行う際、大切にしていることがある。

「やってみてうまくいかなければ、すぐに改善するか、やめればよいのですから、先生方と十分に話し合い、学校にとってよいと思ったことは、まずは挑戦するようにしています。生徒が大きく成長するために、全力で三兎を迫る環境の実現に向けて、これからも先生方との対話を重ね、挑戦を続けていきます」(吉場先生)